

1. 久徴園メインコース

久徴園 入口



久徴園メインコースは、1号館東側にある久徴園入口から始まります。久徴園入口にあるロックガーデンや池では、山陰の山野草や湿地の植物を見ることができます。さらに、散策路を進むと、様々なカエデ類や照葉樹林、ブナ科の落葉樹などが数多くあります。山頂広場に向かう階段の途中には、東屋や野鳥の水浴び場があります。ここでは、野鳥の鳴き声や風に揺れる木々の音なども聴くことができます。山頂広場の展望デッキからは、出雲市の街並みや北山、斐川平野の景色を一望することができます。

写真・左から順に
ナンゴククガイソウ / ミツガシワ / タニウツギ / イソギク / イヌガシ / イズモコバイモ / ミチノクフクジュソウ / オオバギボウシ / イロハモミジ / トウテイル / シロヤマブキ / エンコウソウ



イズモコバイモ (ユリ科 花期/3~4月 結実期/5~6月)

「出雲小貝母」と書きます。佐田町、大田市、邑南町の数カ所で見つかった島根県固有の稀少種です。高さ15cm前後の可憐な草花です。ユリ科にバイモ属というグループがあり、クロユリやバイモとともにコバイモを含んでいます。30年程前にそのコバイモの一種が佐田町で山野草愛好家の故 釜田窈舟氏らによって発見されました。早春、2枚の対生葉と3枚の輪生葉の先に、径2cmばかりの白色一小花を斜め下向きに咲かせており、近県にあるホソバナコバイモと考えられていました。



イズモコバイモ

故 丸山 巖先生 (p.114 参照) はこれを自宅の庭 (彩紫花苑) に植え、詳しく研究観察しておられました。ある朝、丸山先生の奥さんあやこの絢子夫人がこの花を眺めていてどこかホソバナコバイモとは違うことに気がきました。それを聞いた丸山先生は植物学者と共に再検討され、ホソバナコバイモとは明らかに異なる独立種になるとし、出雲地方の名をとってイズモコバイモ「出雲小貝母」として発表しました。また、学名^aを *Fritillaria ayakoana* Maruyama et Naruhashi として新種発見のきっかけとなった絢子夫人の名前を種小名としています。しまねレッドデータブック^bの緊急保護種6種中の1種にあげられている貴重種です。

a 学名 / リンネが提唱した「二名法」による世界共通の生物の名称 (学名) (p.105 コラム参照)

b しまねレッドデータブック / 絶滅のおそれのある野生生物を段階的にリストアップしたデータブック

サンイントラノオ (オオバコ科 花期/8~10月)

オオイヌノフグリ「大犬の陰囊」という植物をご存じでしょうか。道端や畑のどこにでも生える草本ですが、青紫色の可憐な花を咲かせます。このオオイヌノフグリの近縁にホソバヒメトラノオという植物があり、穂のようになった総状花序^aを咲かせます。山陰でホソバヒメトラノオとされていたものが形態に違いが見つかり、サンイントラノオ「山陰虎の尾」となりました。県内でも、出雲、大社辺りから石見中央部の山地露岩上に少しずつ生えています。やはり、立久恵峡から佐田町にかけても点々とあります。8月から10月頃、立久恵峡を探索するか、久徴園入口のロックガーデンを丹念に探してみてください。夏には青紫色の穂状花を見つけることができるでしょう。手折らないでそつと鑑賞しましょう。



サンイントラノオ

a 総状花序 / 中軸から柄のある花をたくさん下から咲かせる花序のこと。ギボウシ、クズなども総状花序をもつ。(「はじめに」を参照)

トウテイラン (オオバコ科 花期/8~10月)

トウテイラン「洞庭藍」は、京都府、兵庫県から鳥取県の日本海側に分布するものですが、隠岐島に大群落があることがわかりました。葉に綿毛が多く、粉白色をした植物が瑠璃色の穂状花を咲かせます。藍色の花が中国の洞庭湖の水のように美しい色をしているというので「洞庭藍」の名前がついたという説もあります。実際は、オオバコ科でサンイントラノオの親戚にあたり、県内では隠岐にだけあって隠岐の準固有種というものです。海岸部の岩上を好んで生育するため久徴園で咲き続けられるかどうか心配ですが、普通の土壌でもあまり嫌わない性質もあるらしく大切に育てたい植物の一つです。東京オリンピック・パラリンピック2020で造られる花壇に県の花としてこのトウテイランが選ばれ、植えられることになっていました。



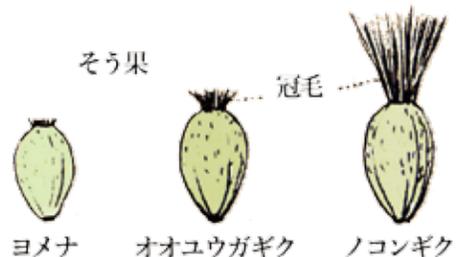
トウテイラン

ノコンギク コンギク (キク科 花期/8~11月 結実期/9~12月)

秋の山野を彩る青紫色系の野菊にノコンギク、ヨメナ、オオユウガギクがあります。道ばたや草原の多少湿気がある所によく生える多年生草本で、舌状花^aが紫色、筒状花が黄色のキクです。染色体数^bは、ヨメナ(2n=63)、オオユウガギク(2n=72)、ノコンギク(2n=36)という違いがありますが、花以外でも、葉の形態、全体の大きさなど非常によく似ているので一見すると違いが全く分かりません。しかし、果実にある冠毛の長さで容易に見分けることができます。冠毛というのはキク科の果実の上部にある毛のことです(右図参照)。冠毛が1mm位のはオオユウガギク、それより短いものはヨメナ(約0.5mm)、4mm位の長いものがノコンギクです。コンギクは「紺菊」で、ノコンギクの花の色が濃紫色の栽培品ですが、野生化しているものもあります。



ノコンギク



a 舌状花 / キク科で1つの花に見えるのは花の集合体で

長い花びら(花冠)のあるものを舌状花、ないものを筒状花という。

b 染色体数/細胞の核の中にある棒状~ひも状の物体。種によってその数が決まっている。ヒトは2n=46。

オオメノマンネングサ (ベンケイソウ科 花期/5～7月)

メノマンネングサという多肉葉の小さな植物があります。キリンソウやベンケイソウの仲間、乾いた岩上にも生える多年草です。このメノマンネングサに比べて、花弁が長く4～6枚(メノマンネングサは5枚)、葉も細長く、草全体が大形になる等、少し違ったマンネングサがあることを丸山先生が見つけました。そして、神戸川沿いの出雲市殿森から立久恵峠を経て佐田町までに限って分布していることも分かりました。慎重な学術的検討の結果、独立種として認定され、オオメノマンネングサ「大雌の万年草」という名称がつけました。5～6月頃の立久恵峠の壁面を一面に黄色に彩るのはこのオオメノマンネングサとマルバマンネングサなのです。オオメノマンネングサは立久恵峠の特産種の一つで、しまねレッドデータブックの要保護種です。



オオメノマンネングサ

コラム



～花の色が赤や青や黄色等と多彩なわけ～

花の色はどのようにして現れるのか。それは、花びら(花弁、花被)の細胞に色素を持つからだ。色素は遺伝子によって作られるが、その遺伝子は種々様々で、従って花の色も千差万別である。といっても、基本は3種の色素が基になっている。①赤、青、紫、ピンク、オレンジまで幅広い発色をするアントシアニン系色素、②黄色を表すフラボン系、③濃い黄色や橙色からオレンジ色を発現するカロチン系である。花全体で3割強ともっとも多い白色花は、色素を持たない。花びらの細胞が光を乱反射して白く見えるのである。また、黒い色素もない。真っ黒い花がないのはそのためだが、紫の色素(アントシアニンなど)が多量に含まれると黒っぽく見える場合がある。黒バラ(上図)、クロユリなどがそれである。花の形や色は、私たち人間を楽しませてくれるが、本来は昆虫のため、受粉のためなのだ。花はどうして美しく多彩な色をしているのか、それは昆虫を誘って蜜を与え花粉を媒介してもらうためと解釈されている。色の違いは、受粉に必要な昆虫を引きつけるためだとされている。例えば、ミツバチは黄色や白色に、アゲハチョウは赤色を識別しやすいという。昆虫の色の識別は、人の場合とやや異なり、人の目には見えない紫外線も識別でき、花から発する紫外線で蜜のありかを判別できるという。人はこうした花の戦略に肖あやっているといえるのかも知れない。

次に、池の湿地植物に目を移してみましょう。エンコウソウ、ザゼンソウ、ミツガシワ、ミズバショウ・・・など様々な植物を見ることができます。開花期順に紹介をします。

エンコウソウ（キンポウゲ科 花期/4～6月）

池には、柄の先にハート形の葉が付いた水草があります。これをエンコウソウ「猿猴草」といい、その茎を猿の腕に見立てた名前だといえます。花茎が立たず、横に寝る特長があります。5月頃、茎の先に黄金色の1～2花をつけますが、花弁状に見えるのは萼片^aで花弁はありません。同じ仲間のリュウキンカ「立金花」(4～6月)は茎が立ち金色の花を咲かせるとの意です。赤名湿原などが南限とされていますが、もともと氷河時代の残存種ともいわれ、北国では湿地や小川の淵などで雪解けを待って咲く美花の1つになっています。



エンコウソウ

a 萼片/花を構成している最も外側の葉状のもので、花を支える役割を持つ。単子葉植物など多くの花が花弁状に置き換わっていることがある。

ザゼンソウ（サトイモ科 花期/4～6月）

春先、土中から暗紫色の仏像の光背^{こうはい}に似た仏炎苞(写真参照)というものを立て、中に黄色の花序があり悪臭を放ちます。この花の姿を僧侶が座禅をしている様子に見立てて「座禅草」といいます。また、達磨大師の座禅の姿にも似ていて「達磨草」とも呼ばれます。ザゼンソウは、滋賀県以北に分布していますが、島根県内では、小型のヒメザゼンソウが中国山地の湿地に生えています。ザゼンソウに近縁のミズバショウは、少し遅れて花が咲きます。(次頁)



ザゼンソウ

ミツガシワ（ミツガシワ科 花期/4～8月）

北半球の亜寒帯、寒帯に分布します。といっても九州から本州、北海道の10カ所内外の山地の池沼地に残存する北半球植物です。ミツガシワは「三榭」で、3つの小葉が榭の葉に似ていることにより、花は1cm程、5弁の花びらの内側には毛があり、下から上へと咲き上がります。島根県内では、赤名湿地やその周辺の溜め池などに分布しており、極めて稀な存在です。絶滅危惧種II類に分類されています。



ミツガシワ

ミズバショウ（サトイモ科 花期/5～7月）

「夏がくれば 思い出す・・・水芭蕉の花が 咲いている・・・」の江間章子作詞の「夏の思い出」でよく知られたミズバショウ。中部地方より北の多雪地帯に群生し、雪解けを待つように白い花を咲かせます。従って、久徴園や吾妻山の池など中国地方のミズバショウは自生ではなく、移植したものなのです。右の写真を見て下さい。白い花の部分は、実は仏炎苞という花の飾りで、実際の花は中心に棒状に立つ緑色の花穂という部分です。ここに沢山の小さな黄色の花がついています。これがサトイモの花の構造に相当し、ザゼンソウやテンナンショウ類と同じサトイモ科に分類されています。時々花を咲かせるサトイモも同様の構造の花です。花の後、葉はどんどん成長して1m近くにもなり、芭蕉の葉を思わせるところから水芭蕉の名がつけました。 石狩の雨おほつぶに水芭蕉（飯田蛇笏）



ミズバショウ

コウホネ（スイレン科 花期/6～9月）

スイレン科の水草で、ハスやスイレン、ヒツジグサと同じ仲間です。水底の泥の中に白くて太い地下茎があり、その先から水中や水上へ細長い葉をぬき出します。基部は矢じり形に切れ込みます。夏にお椀状の黄色花をつけますが、花弁状に見えるのは萼片です。中に1本の雌しべと沢山の雄しべや花弁が整然と並んでいます。コウホネは「河骨」で、よく河に生えていて、根茎の形が白骨状に見えることによります。尾瀬沼にはオゼコウホネがありますが、葉は水面に浮き、コウホネのように水の上にはぬき出ません。咲きたけて河骨水に傾ける（近藤不彩）



コウホネ

サワギキョウ（キキョウ科 花期/8～9月）

キキョウを含めてキキョウ科の植物には山草として愛される花が多くあります。ツリガネニンジン、ソバナ、シデシヤジンやホタルブクロなどの仲間です。このサワギキョウも美しい花だと思います。上皇后さまのお好きな花の一つ。サワギキョウ「澤桔梗」の名の示す如く湿池に生える多年生草本で、高さ50～100cm、葉は細長く縁に細かい鋸歯があります。花は8～9月頃、茎上部に長い総状花序をつくって下から上へと順に咲きます。花冠は深い紫色で、二唇形といって上唇は二裂、下唇は三裂、筒状の五本の雄しべを花柱がつかぬいています。ここには鳥根県下の山間の湿原産のものが植えてあり、毎年、夏に美しい花をつけます。

山の池に紫に咲ける沢桔梗人の来りて折ることもなし（島木赤彦）



サワギキョウ

オモダカ（オモダカ科 花期/8～10月）

オモダカとは、想像もつかない名前ですが、「面高」と書きます。矢じり形の葉が人の顔に似ていて、水面から高く伸び出すという想像からついた名前だそうです。水田や沼地に群生する水生植物。夏に3枚の花弁を持つ小さな白い花を咲かせます。地中に地下茎を伸ばし、先端に球茎（いも）をつけます。クワイはオモダカの変種で、大きな球茎は正月のおせち料理の材料の一つです。

おもだかのなほ咲きつづき秋涼し（山口青邨）



オモダカ

池の周りのロックガーデンを見てみましょう。キョウガノコ、シュウメイギク、オオバギボウシ、エビネ、アキチヨウジ、ヤマハッカ、キセワタ、フタリシズカなどを見ることができます。

キョウガノコ（バラ科 花期/6～8月）

自生のもは見つかっていないようで、鑑賞用の花です。淡紅色の花序を京都の染め物、京鹿ノ子に見立てたものです。これをシモツケソウという人がありますが、実際は、その近縁種であるコシジシモツケソウの栽培種と考えられています。シモツケソウも掌状に5～7裂しますが、その下の側小葉が大きく多数あるのに対し、キョウガノコはほとんど見られず、無いものもあります。また共に、下の方の葉は長い葉柄があります。茎の先端に紅紫色の小さな花が房状に咲き風情があるので、茶花や庭に植えて鑑賞されます。

京鹿の子緑の空にあかね雲（伊藤松風）



キョウガノコ

シュウメイギク（キンポウゲ科 花期/9～11月）

シュウメイギクは、「秋明菊」と書きますが、秋に爽やかに咲くことから名付けられたのでしょうか。花柄の先に赤紫色の大きな花を咲かせます。白花もあります。花びらのように見えるのは、実は萼片というもので本物の花弁はありません。中央に黄色の雄しべが多数あります。キクという名前ですが、キンポウゲ科のアネモネの仲間、プロトアネモネンという毒素を含んでいて有毒です。乳液に触れるとかぶれます。中国原産で京都の貴船山に沢山植えられていたので、「貴船菊」とも呼ばれていて、秋の茶花の代表的なお華です。



シュウメイギク

オオバギボウシ (キジカクシ科 花期/7～8月)

山地の湿った草原や丘陵地に生えます。葉の大きさが、本州以南にあるコバギボウシが10～20cmであるのに対して、北海道から本州までにあるオオバギボウシでは30～40cmと大形になります。総状花序の一個一個の蕾の形が橋の欄干の飾りの擬宝珠ぎぼうしゅうに似ているからというのですが、いかがでしょうか。もっとも、ネギの花のネギ坊主も擬宝珠に見立てています。昔の植物学者は発想も豊かにいろいろな形の物に植物を見立てて名前を付けました。ギボウシは新芽の時に茹でて酢みそや胡麻あえにして食べます。

滝壺やささげる花の皆擬宝珠 (目迫秩父)



チョウジソウ (キョウチクトウ科 花期/5～6月)

チョウジソウは、草丈40～80cmになる湿地性の草本で、5～6月頃茎頂に数個の青紫色の花を咲かせます。長さ1cmほどの花冠(合弁花では花弁にあたるもの)の先端は5裂して平開し、丁字状に見えるので「丁字草」と名付けられました。香料の「丁子」の花に似ているからとの説もあります。昔は湿地の至る所にあつたらしいのですが、今は絶滅危惧種に指定されています。島根県内では、津和野町の地倉沼に群落を作って残っており、出雲市大社町にもわずかに見られます。また、隠岐にも記録があります。園芸種のチョウジソウは、北米原産のホソバチョウジソウ、ヤナギバチョウジソウなどです。



チョウジソウ

エビネ (ラン科 花期/4～5月)

山の落葉樹林内に生えるラン科の多年草です。春、2～3枚の葉の中から30～50cmの花茎を出して淡紅白色の花を多数咲かせます。エビネは、地下茎の根茎が海老の尾に似ているので「海老根」と呼ばれます。大形で黄色の花をつけるキエビネ(黄海老根)、夏に淡紫色の花をつけるナツエビネ(夏海老根)、赤くシワのある唇弁を猿の顔に見立てたサルメンエビネ(猿面海老根)などがあります。これらは一部の山野草家の乱獲により激滅しています。「手に取るなやほり野に置けレンゲソウ」のごとく、自然の中で咲いてはじめて美しく、人家に持ち帰るのは良くありません。

咲ききつて同じ高さやえびね蘭 (高尾富美子)



エビネ

アキチョウジ (シソ科 花期/9~10月)

岐阜県以西、四国、九州の山地の日陰に普通に自生する多年生草本で、高さ60~90cm、葉は対生、長楕円形で鋸歯があります。長い柄のある青紫色の唇形花を数段にわたって着けます。花が秋に咲き、横向きに丁の字に咲くというので「秋丁字」と名づけられています。よく見ると久徴園の杉林の中にもあります。関東から中部地方にはセキヤノアキチョウジがあります。

アキチョウジに似て花が小形で筒も短いものにヒキオコシ(別名、エンメイソウ)というのがあります。葉に苦味がありますが、起死回生の効力があるというのでヒキオコシ(引起)といい、エンメイソウ(延命草)も同じ意味からついたものでしょう。出雲(雲州)の奥地に入りますとクロバナヒキオコシ(黒花引起)やサンインヒキオコシ(山陰引起)も自生しています。



アキチョウジ

ヤマハッカ (シソ科 花期/9~10月)

山野の道端などに普通に生えている草丈70~80cm位のシソ科の草本です。9~10月頃、枝先に細長い花柄を出して青紫色の小さい花を咲かせますが、シソ科の花は、上唇と下唇に分かれていて、下唇が船形をしていて虫の止まり場となっています。雄しべ、雌しべはその中に隠れています。「山薄荷」(ヤマハッカ)と書きますがハッカの臭いはあまりしません。



ヤマハッカ

キセワタ (シソ科 花期/8~9月)

山の草原に生えるシソ科の多年草です。島根県全域の草原にも稀に見られたようです。8~9月ころ、対生する細長い葉の付け根に、淡紅紫色のシソに似た花を数個ずつ輪生してつけます。キセワタの花は唇形花で、下唇は3つに裂けて下に垂れています。そして、上唇の花弁の表面に白毛が密生していて綿を被っているようだというので、「着せ綿」の名前をもらいました。輪生する花の脇から沢山の刺状の萼が出ているのも特徴です。メハジキという草本もキセワタによく似ていますが、葉の先が3裂し更に細かく分かれる点で違います。



キセワタ

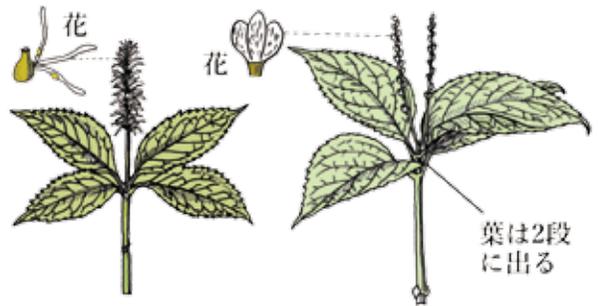
フタリシズカ (センリョウ科 花期/4～5月)

この山野草群の中に数本のフタリシズカがあります。もちろん花穂の本数が1本か2本つくことによりますが(4～5本つくこともあります)、似たものに、ヒトリシズカ(3～4月)があります。ヒトリシズカは、葉が4枚輪生のように見えながら、2段の対生のものがほとんど同じところから出ます。フタリシズカは、明らかに2段にずれて出ます。花(下図)や葉の質感(ヒトリシズカはややツヤがある)、大きさでも見分けることができます。

一人静二人静も草の名や (一茎草) / 二人静ひとり静よりさびし (角川照子)



フタリシズカ



ヒトリシズカ

フタリシズカ

～ヒトリシズカ/一人静～

コラム

「一人静」は、名前からすると、1本静かに咲いているように連想させるが、実際は数本林立して生える。地下茎で増えるからだ。株立ちという。静は静御前からのネーミングだが、源義経の恋人・静御前は、鎌倉に送られてから義経の子を産む。男の子だったので幕府の命で殺されてしまう。失意の静は鎌倉を去り行方不明となる。一方の義経一統は平泉に逃れたが、藤原泰衡の寝返りで自決してしまう。悲劇の人たちは、あの世で再会し、揃ってヒトリシズカになり生まれ変わった。なので、ヒトリシズカは株立ちになっている。ひときわ美しいのが静御前それとも義経、大柄なのが弁慶だろうか・・・

コモチマンネグサ
(ベンケイソウ科)スズムシバナ
(キツネノマゴ科)

エゾミソハギ(ミソハギ科)



ミチノクフクジュソウ (キンポウゲ科 花期/2~4月)

「陸奥福寿草」と書きます。フクジュソウは「元日草」というおめでたい花で、正月の盆栽として床などに飾ります。正月に花を咲かせるのは人工的にそうしたもので、自然界ではずっと遅く、早くて2月、大体3月から4月に咲きます。地下茎は短く、暗褐色のひげ根があります。根茎からは茎が伸び、深い切れ込みの小葉からなる羽状複葉で互生します。春、新しい葉の展開と共に、茎先に暗緑紫色の萼片をもつ黄色花をつけます。ミチノクフクジュソウは茎が中空で萼片が短く、花卉の1/2程度。それに対して、フクジュソウの萼片とくさがみねは花卉と同じ長さ、又は、花卉よりやや短い程度です。島根・山口両県境の十種峯、広島県帝釈峡には自生しますが、本州から九州まであります。中国地方では花の後、葉が大きく成長して一見セリ科の葉かと見まがうほどになります。ヨーロッパのフクジュソウは、赤い花をつけます。日本でも園芸品には赤花があります。



ミチノクフクジュソウ

朝日さす老師が家や福寿草 (与謝蕪村)

福寿草を緑のひかりに置かしてわが見つるとき心は和ぎぬ (斉藤茂吉)

ゲンカイツツジ (ツツジ科 花期/3~4月)

春早く、葉の出る前に枝先に紅紫色の花が数個ずつ開きます。直径3~4センチの広漏斗形で深く5裂します。玄界灘を取り囲むように西日本と朝鮮半島に分布しているので、「玄海躑躅」(ゲンカイツツジ)と名付けられています。島根県では、石見の益田市、日原町にわずかに自生しています。庭木として栽培もされ、久徴園入口に植えられています。



ゲンカイツツジ

マユミ (ニシキギ科 花期/5~6月 結実期/10~11月)

全国の丘や山地に生える落葉の小喬木^{しょうきょうぼく}(普通3~5m)です。ニシキギの仲間ですが、緑色の枝に翼はありません。秋に枝先に1cmほどの赤い果実を付け、4つに裂けて綺麗な橙赤色の種子が顔を出します。マユミは「真弓」と書き、この樹の枝がよくしなるため、弓を造ったことによります。盆栽の材料にもされます。



マユミ

a 喬木/樹高約5m以上の高木。そのうち、小喬木は10m以下の木をいう。

シロヤマブキ (バラ科 花期/4～5月 結実期/9～10月)

バラ科ヤマブキ属の高さ1～2mの落葉低木で、晩春、枝先に4花弁の白色花を1個ずつ咲かせます。葉は縦皺が多く、裏面にへこみます。葉が互生のヤマブキとは別種で、シロヤマブキは対生である点で区別されます。晩秋に黒い果実を4個ずつ付けます。中国地方と福井県に限定的に自生していて、島根県では出雲市平田町佐香に自生地があり貴重です。



シロヤマブキ

淡きもの白山吹の白き日々 (太田無一)

ナンゴククガイソウ (オオバコ科 花期/7～8月)

登山道の脇などの草原で見かける1m前後の草本です。よく群落をつくっています。山道を息せき切って登っていると突然現れるこのお花畑の光景にホッと一息させられます。鳥取県大山の草原にはたくさん見られます。夏7～8月ころ、葉の先に突き出た紫色の細長い円錐形の花穂は林立して美しく、下から先へと咲き上がります。4～8枚の輪生する葉が段々になって層をなすので「九蓋草」といい、本種はそれより南の西日本に多く分布するので「南国九蓋草(ナンゴククガイソウ)」といいます。クガイソウとは、花軸に毛がない点で区別されます。久徴園入口にある案内板下あたりに植えられています。



ナンゴククガイソウ

キッコウチク (イネ科 花期/不明)

中国原産で筍を採るために移入されたモウソウチク程には太くはなりません、モウソウチクの園芸種です。根元の部分が互いにふくらんで亀の甲状になることから「亀甲竹」の名前がついています。膨らみの部分が仏の顔に見えるというので別名を「仏面竹」ともいいます。膨らみの程度は顕著なものから軽度のものまでできます。中には亀甲が現れずモウソウチクの状態に先祖帰りしたり、亀甲の状態が乱れたものがあります。水戸光圀が持っていた杖は、この亀甲竹で造られたものだといわれています。



キッコウチク

ユキワリイチゲ (キンポウゲ科 花期/3~4月)

春3月、三角形の汚い葉っぱの間から花茎を出し、菊の花に似た一個の花をつけます。まだ雪の残る頃その間から割って咲きでる様子から「雪割一華(花)」の名前がつけました。葉っぱの裏が紅色なのでウラベニイチゲ、花も往々にして瑠璃色なのでルリイチゲという綺麗な名前もあります。花びら状に見えるのは実は萼片で花弁はありません。多くの花がそうであるように日差しを受けて開き、夜や曇りの日はしぼみます。春一番に美しく咲くというので、スプリング・エフェメラル「春の妖精」といわれます。立久恵の溪谷や佐田町の樹林下などに群生して咲きます。



ユキワリイチゲ

キクザキイチゲ (キンポウゲ科 花期/3~5月)

花が菊に似ているので「菊咲一華(花)」といわれます。キクザキイチリンソウということもあります。いわゆるイチリンソウとは葉の切れ込みが浅く、萼片が多いので異なります。ユキワリイチゲ同様花弁を欠き、花弁状に見えるのは萼片です。花色には白色から淡紫色と変化が多く、同一地点に混在します。本来近畿地方以北に多く分布するものですが、中国山地(出雲部東部)数百mの所まで南下してきていて、この地に取り残されたものと考えられています。蝶のギフチョウは「春の女神」と呼ばれ、キクザキイチゲは、スプリング・エフェメラル「春の妖精」と呼ばれます。



キクザキイチゲ

アズマイチゲ (キンポウゲ科 花期3~5月)

アズマイチゲ「東一華」は、葉は深く3裂するのが特徴です。花は直径3~4cmで白色の8~13個の萼片からなります。花弁はなく、横向きか垂れ下がるように咲きます。アズマイチゲ、ユキワリイチゲ、キクザキイチゲともに夏には枯れて見えなくなり、地下茎だけで夏を過ごします。春、久徴園入口の案内看板の下辺りで花が見られます。こちらもスプリング・エフェメラル「春の妖精」の一つです。



アズマイチゲ

トサミズキ（マンサク科 花期/3～4月 結実期/10～11月）

ミズキ「水木」とは、水の出てくる木です。この木では実験をしてはいけませんが、樹液が多いので春先に枝を折ると水が吹き出します。混同されやすいですが、ミズキはミズキ科で、トサミズキはマンサク科に分類されます。高知県（土佐地方）に自生地があります。春、葉の出る前に黄色い花を下垂するように咲かせます。県内には、稀に自生するコウヤミズキという低木があります。庭木として栽培される種には、ヒュウガミズキもあります。

土佐みずき山菜萸も咲きて黄をきそう（水原秋桜子）



トサミズキ

バイカウツギ（アジサイ科 花期/6～7月 結実期/9～10月）

ウツギ「空木」といっても、ユキノシタ科のウツギではなくアジサイ科です。花が梅の花に似ているのでバイカといいます。山地に生えています。今時、木と木をこすって火を起こすことは少ないですが、ただ木と木をこすれば良いというものではありません。柔らかい木とウツギのような堅い木とをこすからこそ柔らかい側がモグサのようなオガ屑となり、これが煙を出し始めるのです。大昔の火起こしの方法です。



バイカウツギ

タニウツギ（スイカズラ科 花期/5～7月）

タニウツギ「谷空木」は、日本海側の山野に普通に生えています。梅雨の頃、山の道端に桃紅色のラッパ状の花が枝先に咲いている光景を見ることができます。別名をベニウツギというくらい鮮やかな花の色です。北陸地方では、カジバナ「火事花」といい、縁起を担いで庭には植えない習慣があるといいます。この仲間には白い花もあり、こちらはシロバナタニウツギもしくはシロバナウツギといいます。また、宮崎以西の太平洋側に生えるニシキウツギ「二色空木」があり、これは花が淡黄白色から紅色に変わります。よく植えられているのは、北海道南部から九州の太平洋側に分布するハコネウツギです。



タニウツギ

シロモジ (クスノキ科 花期/4月 結実期/8~9月)

中部地方以南の山地に自生する落葉低木で高さ5mほどになります。10cm前後の葉は普通先端が3裂してダンコウバイより深く凹み、3本の葉脈が顕著です。春、葉に先立って黄色の小さい花が3~5個集まって咲きます。雌雄異株で、雌株には8~9月に1cmほどの丸い果実を付けます。この樹は雄株なので実はありません。久徴園入口のすぐ左にあります。



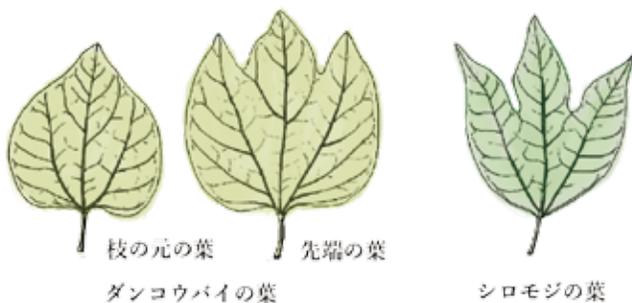
シロモジ

ダンコウバイ (クスノキ科 花期/3~4月 結実期/9~10月)

ダンコウバイは、山地や山の道端などによく見られる落葉小高木です。枝に芳香があって「檀香梅」なのですが、真の檀香梅は中国ではロウバイのことだそうです。ダンコウバイは子供が描く典型的なチューリップのように3裂した葉の形が特徴です。枝の元の方の葉は切れ込みはなく全縁で、春先に、まだ葉のない枝に芳香のある黄色の花をつけ「ウコンバナ(右近花)」の別名があります。秋の紅葉もまた黄色で美しいです。



ダンコウバイ



ハナイカダ (ハナイカダ科)



バイモ (ユリ科)



モモ (バラ科)



では、ここから少し散策路を登っていきましょう。ここでは、樹木や草本に加え、様々な種類のカエデ類も見ることができます。また、バリバリノキの周辺には、シラン、シモバシラ、キリンソウ、ハシバミ、ハナイカダなどが見られます。足を止めて、ゆっくりと探してみてください。

イヌガシ (クスノキ科 花期/3~4月 結実期/10~11月)

久徴園に向かって一番左の端にある木です。カシに似ているが本物ではないという意味でイヌガシです。実際はクスノキの仲間に入ります。本州中部以西の山地の小高木、約4m程度にはなります。葉は3本の葉脈(3行脈といいます)がはっきりしています。雌雄別株で、雌株には赤い花が集まって咲きます。果実は楕円形で、黒紫色に熟します。イヌガシのちょっと奥にあるバリバリノキ(葉の長い木)と近縁です。このイヌガシには、サルナシというツル植物が登っています。



イヌガシ

サルナシ (マタタビ科 花期/5~7月 結実期/10~11月)

サルナシ(猿梨)は、雌雄異株の落葉するつる植物です。ナシに似た果実ができ、猿が好んで食べることから「猿梨」と呼ばれます。久徴園のものは独身のサルナシなので、果実はできません。山に行った時に探してみてください。秋に、右図のような2~3cmの緑黄色、広楕円形の液果になります。横に切ると、キウイフルーツそっくりで味も美味しい果実です。是非、



試食してみてください。また、サルナシの茎は、成長すると径5cm、長さ50mにもなるといい、強靱でシラクチヅルといって徳島県祖谷の“かずら橋”の蔓の材料にもされています。

この仲間にはマタタビ(6~7月、9~10月)があります。マタタビは花期には枝先の葉が白くなり、遠くからでも見分けがつかます。果実はサルナシと似ていますが、細長くたびたび虫が寄生して虫こぶ(虫えい)をつくり、形が図のようにデコボコ状になっています。マタタビ類の実はネコ属の動物の好物で、食べると恍惚状態になってしまいます。実験によると、ヨツボシクサカゲロウという昆虫の雄もマタタビに誘われて集まってくるといわれています。人間は食べても何ともありません。果実を拾ってきてマタタビ酒や塩漬けにします。サルナシもマタタビも甘い実なので、猿だけでなく山の動物の貴重な食料になっており、これらの糞によって種子が運ばれ生息域を広げていると考えられています。県内には、果実の大きなシマサルナシ(益田市)や、葉の裏の白いウラジロマタタビも分布しています。

フシグロセンノウ (ナデシコ科 花期/7~10月)

ナデシコ科のセンノウ(仙翁)というグループの草本の一種で、山地の道端などでひょっこり出くわすことがあります。花が朱赤色でよく目立ちます。花弁は5枚で直径5~6cmの赤い花が茎の先端に数個ずつ咲きます。茎の節の部分が膨らんで紫黒色になっているので「節黒仙翁」といいます。夏から秋にかけて、三瓶山などのちょっとした山の道端でよく見かけます。久徴園では、バリバリノキの下あたりで見ることができます。花期は夏~初秋です。



フシグロセンノウ

バリバリノキ (クスノキ科 花期/8月 結実期/翌6月)

イヌガシの奥にある大きな樹です。15cmもある長い葉が特長です。暖地の山地に生える常緑の高木です。樹皮が滑らかで灰褐色、長細い葉は表に艶があり裏が粉白色です。真夏に極めて小さな黄色い花が集まって咲きます。翌年の初夏には、1cm少々の実がたくさんなり、黒く熟します。葉や枝に油分が多く、バリバリとよく燃えるのでとか、葉が風でバリバリと音がするとかでこの名前がついたという変わった樹です。



バリバリノキ

ヒサカキ (モッコク科 花期/3~4月) 結実期/10月~)

山地のどこにでも見られる常緑の低木ですが、当地方ではシブキと呼び墓や仏壇に供えたり、サカキの代わりに神棚に飾ったりします。3~4月ころ、黄白色の小さな花が枝に密に着きますが、プロパンガスのような臭いをまき散らし、ガス漏れと勘違いされ119番する例が知られています。晩秋に黒い実がなり、つぶすとインクのような汁が出ます。果実は翌年の春まで残って花と一緒に見ることができます。葉が小型で丸みのあるハマヒサカキは、海岸性で島根県が北限となっていて、日御碕海岸には群落を作っているのが見られます。また、道路の脇や分離帯として植えられることもあります。



ヒサカキ

カタクリ (ユリ科 花期/3~5月)

カタクリは、かつてはこの根茎から正真正銘の片栗粉をとりました。土中深くに根茎があり、相対する2枚の葉には紫色の斑点があります。4~5月、淡紅紫色の花を斜め下に開き、6花弁(正しくは花被片)は反り返ります。その基部にW形の紫斑があり、雄しべと雌しべが下に突き出ます。さく果からこぼれ落ちる種子の先端に、糖質を含むエライオソームがあります。(下記コラム参照)根茎でも増えるので、本来は丈夫で繁殖力の強い植物です。しかし、人間の執拗な盗掘には抵抗する術が無く、県内でも数が減ってしまいました。

横田町の船通山では毎年、カタクリ登山(4月最終日曜日)が行われています。この日は、頂上付近は登山者で賑わい、登山道の列はなかなか途切れない程です。今は厳重な保護が行われていますが、自然は共有物であるということ、植物に合った環境にあるから美しいということを再認識したいものです。



カタクリ

～ 種子の拡散攻略 ～

エライオソーム

コラム

草花は子孫繁栄のため、様々な方法で遠くへ種子を飛散させようと攻略している。風、水流、鳥、動物の糞、動物に付着して、昆虫とさまざまだ。その中でも、昆虫のアリに運ばれて範囲を広げる植物がある。その一つ、カタクリは種子の一端にアリの好む糖質やアミノ酸、脂肪酸を含んだ種枕(しゅちん)=エライオソームという部分をつくって、アリを誘引し、巣に運ばせる。アリはエライオソームだけを食べて、種子本体は巣の外へ運び捨てる。カタクリはそこで発芽し、親株とは離れた場所に子孫繁殖を果たすのだ。このようなエライオソームを持つ植物は、カタクリの他にスマレ、ニリンソウ、フクジュソウ、キケマン、クサノオウなどの仲間で200種類もあるといい、アリ散布植物と呼ばれている。植物も子孫永続のために、いろいろな戦略を持っているものだ。

シラン (ラン科)



シモバシラ(シソ科)



キリンソウ (ベンケイソウ科)



ヤマモミジ (ムクロジ科 花期/5月 結実期/9~11月)

イロハモミジの亜種で、イロハモミジより葉が大きく(約1.5倍)、7~9中深裂し、縁に不揃いの重鋸歯があります。翼果は長さ約2cmでほぼ水平に開きます。日本海側の青森~鳥取県あたり迄の山地に多く生えていますが、庭に植えることも多く、盆栽にしても楽しいものです。建築材、器具材としても利用します。樹によっては別の種類と感じる位に紅葉の色つきには変化がありますが、多くの場合は日の当たり具合の差から起こるといわれています。母種のイロハモミジは京都の高尾山に多いことからタカオモミジ「高尾紅葉」とも呼ばれます。葉が小さく(3~6cm)5~7裂して掌状、枝が水平に広がる傾向があり、もっとも紅葉の美しいモミジとして名所には必ずといってよいほど植えられています。久徴園にもたくさん見られます。苔の上ひとつひとつの散り紅葉(長谷川素逝)



ヤマモミジ

オオイタヤメイゲツ (ムクロジ科 花期/4月 結実期/9~11月)

ハウチワカエデをメイゲツカエデ(明月楓)、コハウチワカエデをイタヤメイゲツ(板屋明月)というのに対して、葉が大形(葉身長6~10cm)なのでオオイタヤメイゲツ(大板屋明月)と呼ばれます。この3者はよく似ていますが、オオイタヤメイゲツは比較的稀に産し、他の2種にくらべて、①葉柄が長くて毛がない、②葉の切れ込みがやや浅くて最も多く(11~13裂)、③鋸歯が鋭く細やかだというのが決め手のようです。中国山地の稜線などに生育するようです。



オオイタヤメイゲツ

チドリノキ (ムクロジ科 花期/4月 結実期/9~11月)

山地の谷間、谷沿いなどに生える高さ10m前後の小高木~高木です。樹皮が黒赤色でなめらかです。葉にはクマシデ(カバノキ科)などのように葉脈が平行に走ります。切れ込みのない単葉の葉が2枚ずつ左右に出ています(対生といいます)。翼のある左右2個の果実が枝に直角に開き、千鳥の飛ぶ姿にたとえて「千鳥の木」といいます。葉っぱが千鳥足のように見えるからではありません。別名のヤマシバカエデ(山柴楓)は薪(たきぎ)になる楓という意味です。



チドリノキ

メグスリノキ (ムクロジ科 花期/5月 結実期/9~11月)

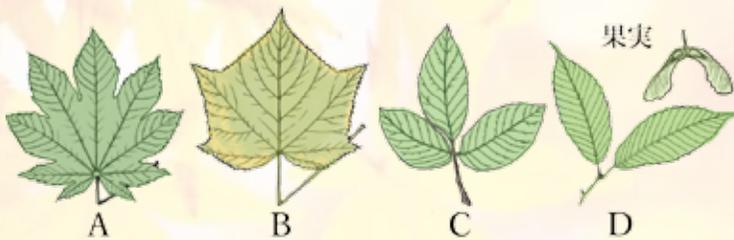
「目薬の木」と書きます。目薬が木からできるといっても信じる人があるでしょうか。事実、民間薬としてこの皮を煎じて目薬にするのです。同じ所から3枚の葉が出る3出複葉のカエデで、剛毛がたくさん生えています。種子が蝶のように舞うので、「蝶の木」が転訛して「長者の木」になったともいいます。紅葉も初め赤紫色、次第にサーモンピンク〜赤色に染まり、大変に綺麗です。出雲地方の山に稀に生えています。



メグスリノキ

ハウチワカエデ (ムクロジ科 花期/4~5月 結実期/9~11月)

葉(葉身長7~14cm)の大きなカエデです。天狗の持つ鳥の羽で作ったウチワに似ているということでハウチワカエデ「羽団扇楓」といいます。もう1つの名前を名月カエデともいいます。これは大きな葉ゆえ名月の明かりでさえ落葉する紅葉が見えるという意味でしょうか。コハウチワカエデ(p.122)とも比較してみてください。葉が葉柄の基部まで切れ込んだ「舞孔雀まいいくじやく」はハウチワカエデの園芸種です。では、次の図の4種のカエデの葉っぱを比較してみてください。どれがどのカエデでしょうか。答えはp.23。



ハウチワカエデ

また、カエデ類には図に示したような果実が9月頃になると枝にぶら下がります。2個の種子が薄い翼を持って向き合っています。この1個をちぎって頭上から落とすとおもしろい飛び方をします。風の力でひらひらと遠くへ飛散させ子孫を広げる役割を持っているのでしょう。

ウリハダカエデ (ムクロジ科 花期/5月 結実期/7~10月)

樹皮が暗緑色でマクワウリの縦縞に似ているので「瓜肌楓」といわれます。若い樹皮では、菱形の皮目が顕著に表れます。山に普通に生えているカエデの一種で、葉は大きく、普通は浅く3裂、稀に5裂し、裏は青白色です。写真のように紅葉が綺麗な樹です。樹によっては黄葉気味にもなります。材が白く玩具、なわ細工物、みの箸などに使われ、樹皮は丈夫なので縄や蓑をつくりました。近縁のウリカエデは葉が小さく、縦長気味なので区別できます。



ウリハダカエデ



昭和40年(1965年)頃の久徴園入口付近(中心にメタセコイア、温室がある。右手には思齋寮、無想庵が見える。)

オオカニコウモリ (キク科 花期/8~10月)

本州北部から中国地方の山地の落葉樹林内の川のそばのようなところに生えます。東北地方では太平洋側に多く、関西地方では日本海側に多くあります。「大蟹蝙蝠」と書きます。葉の姿をコウモリが飛んでいる様とカニ(ワタリガニ?)の甲らの形にたとえたものです。花は8~10月にかけて葉の上部に白色の頭花を沢山つけます。特徴のない味ですが若い葉は食べられます。オオカニコウモリに限らず山菜を楽しむ心得として、根こそぎ採らずほんの一部を分けて頂くという気持ちが大事です。



オオカニコウモリ

アリドオシ (アカネ科 花期/5~6月 結実期/10~4月)

初夏に咲く首の長い白い花、冬に赤く熟す実、それより何よりもするどい刺が特徴です。①あまりの鋭さでアリをも突き刺すことができるという説②刺が多くて、アリでないとい通れないという説もあります。また、実がいつまでも付いているので「有り通す」ともいったり、センリョウ「千両」やマンリョウ「万両」に比べて地味なので「一両」ともいわれたり、小柄ながら話題の多い樹ではあります。



アリドオシ

アオキ (ガリア科 花期/5月 結実期/10月)

山地の林床を構成する常緑の低木で、高さはせいぜい2～3m。枝が緑色なのと年中青々としているというので「青木」といいます。属名の Aucuba はアオキバのラテン語化したもの。3～4月、雄株に雄花、雌株に雌花が咲き、冬から翌年の4月にかけて赤い楕円形の実をつけ、よく目立ちます。斑入り葉もあり庭園に植えられます。なお、島根県の東部を境にして、西部にはナンゴクアオキが、東部日本海側や太平洋側には、背が低く、葉も小さく、葉裏に微毛のあるヒメアオキが分布しています。



アオキの花(雄花)



アオキの果実



～ 離ればなれになった植物 ～

アオキ「青木」という木は、この辺りの山に多い。秋から冬に赤い実を付けて美しく(左写真)、庭木としても植えられている。雌雄異株で、日本と朝鮮南部にのみ分布する。このアオキの実の美しさに18世紀に日本を訪れたイギリス人が母国に持ち帰った。当然この木は雌株で、次の年から実を結ばなかったが、アオキの年中緑色の青々とした木は少なかったので、接ぎ木をして代々育てた。19世紀初めになって、このことが分かると、日本から雄株を持ち帰り、目度く赤い実をならすことができるようになった。ジンチョウゲ(沈丁花)も花が美しく、庭木として重宝されているが、実を結ばない。中国原産で、室町時代に雄株のみが渡来したからだ。キンモクセイ(金木犀)は、10月頃オレンジ色の小さな花を沢山つけて良い香りをまき散らす。やはり中国原産との説があるが近年日本で育成したという見解も出ている。これも全て雄株だけで雌株はなく、結実しない。

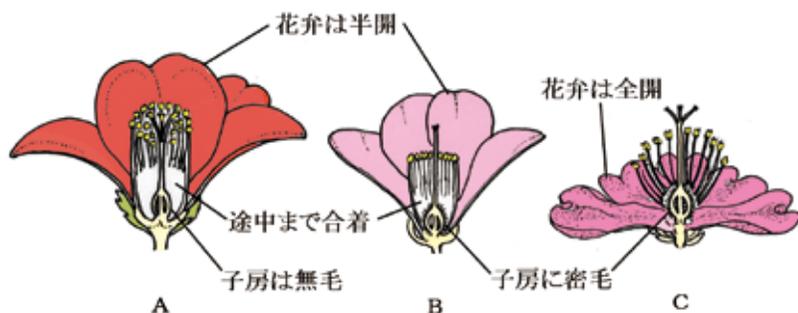
都会地のフキ(フキノトウ)は、雌雄異株だが、最近雌株に実を結ばないという。宅地が広がって雄株と雌株が孤立し、受粉できなくなったからだ。ヤマモモ(山桃)も雌雄異株で街路樹や公園に植えられるが、雌株は熟した実が落ちて地面を汚すので、山地から雄株を選んで植える。そのため、山地で雄株が減少し、花粉不足となって雌株に実がならないという現象が起こっている。

悲しいかな、離ればなれになった植物たち。

答え A. ハウチワカエデ B. テツカエデ(p.76) C. メグスリノキ D. チドリノキ

ヤブツバキ (ツバキ科 花期/2~4月 結実期/9~11月)

東屋の上にあたる場所にあります。園芸種をツバキ、自生のものをヤブツバキもしくはヤマツバキといいます。葉が厚いことから「厚葉木」それがツバキとなったという説、葉に艶があることから「艶葉木」という説があります。「椿」は春に花が咲く木ということで日本で作った和字です。図は、ヤブツバキ、サザンカ、ワビスケの花の断面を示したものです。実物と比較しながらどれがどれか見比べて下さい。(答えは p.26)



万葉集でもヤブツバキは「つばき」です。この木には、万葉和歌の短冊を貼ってあります。

巨勢山のつらつら椿つらつらに見つ^し思はな巨勢の春野を (「万葉集」巻 1-54 坂本人足)

ヤマグルマ (ヤマグルマ科 花期/5月 結実期/10月)

山に生えて葉が車の輪のように付くという意味で「山車」です。常緑の高木になります。樹皮を水にさらしてから叩くとトリモチがとれることからトリモチノキという別名もあります。トリモチといっても分からない人もあるでしょう。今では違法となりましたが、鳥を捕まえる方法です。つまり、おとりのメス鳥を鳥籠に入れて置き、そのそばにチューインガムのように粘ったトリモチを枝にくっつけておくのです。おとりに誘われてやって来た鳥がその枝に止まるとくっついて逃げられなくなるというものです。モチノキからもトリモチをつくりました。

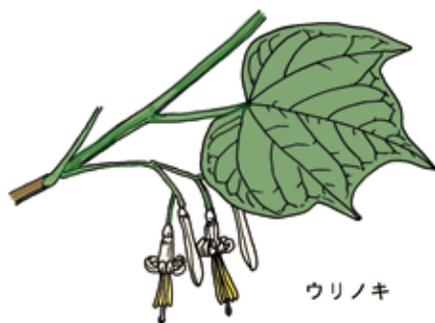


ヤマグルマ

ウリノキ (ミズキ科 花期/4~5月 結実期/9~10月)

せいぜい2~3m程度にしかならない落葉の低木です。葉がウリの葉に似ていることから「瓜の木」という名前がつけました。蕾の時には小さく長い棒状ですが、白い花が咲くと花弁が6枚で反り返ります。葉の下に恥じらいながら隠れるように咲く可愛らしい花です。

実は秋に藍色に熟します。花全てが実らないのか、実の数は少ないようです。



ウリノキ

イヌビワ (クワ科 花期/4～5月 結実期/9～10月)

イヌビワ「^{いぬびわ}犬枇杷」は、山地などに普通に生える3～5mほどの低木でイチジク「^{いちじく}無花果」と同じ仲間です。雌雄異株で、雌株の果実(果囊)は1～2cm弱で、秋に熟し食べられるようです。ビワにも似た果実は、小型で品質の劣ることから「イヌ」がついたのでしょう。また、雄の株に実る果実(果囊)には悲しい物語があります。雄株と雌株の果囊の違いは、下のコラムをご覧ください。

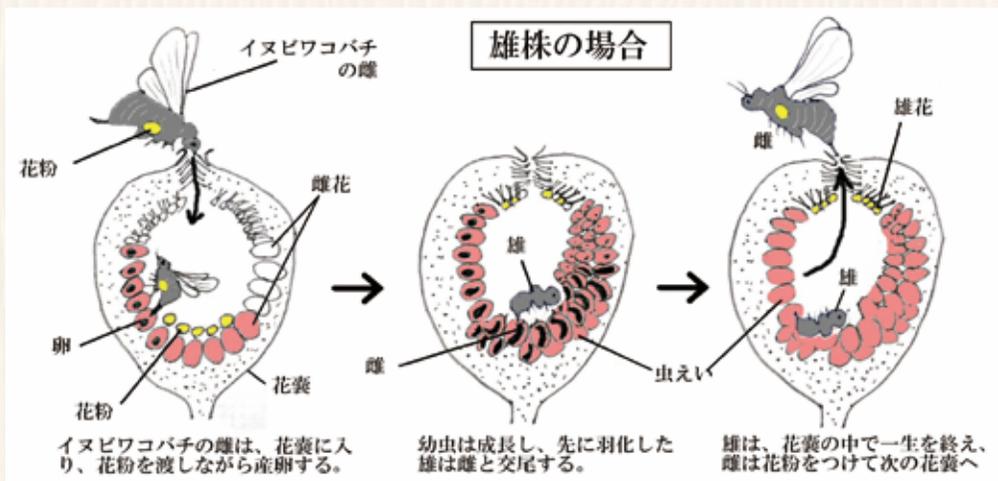


イヌビワ

コ
ラ
ム

～イヌビワの巧みな戦術～

冬、落葉した雄株には大きな^{かのう}花囊がついている。中にイヌビワコバチという寄生バチの幼虫が寄生した虫こぶをつくっている。春、雌株に小さい花囊がつく頃、雄株も花粉をつくり、花囊の中で羽化した雄ハチは雌と交尾をして一生を終えるが、羽根を持つ雌のイヌビワコバチはイヌビワの花粉をつけて口部の穴から飛び出し、別の若い花囊の口部から侵入する。雄株の花囊に侵入した雌バチは、中の雌花に産卵管を突き刺して卵を産むと同時に受粉をさせる。果囊の中で孵化した雌雄の幼虫は虫こぶをつくり、その実を食べて成長し、春、羽化して次の代をつくる。これがイヌビワコバチの一生である。一方、雌株の花囊に侵入した雌バチは、中の雌花に受粉をさせるが、雌花の柱頭がハチの産卵管より遙かに長く、雌花に産卵できない。そこで、雌花には幼虫が孵化せず、めでたく立派な種子をつくり、イヌビワコバチの寄生しない果囊ができ、食べられるという訳である。食べられるというのは、人間の一方的な見方だが、イヌビワからすると果実(果囊)は落下して種子を拡散させ、子孫を繁殖させることに繋がるのである。イヌビワの口部はイヌビワコバチの雌しか通せない構造になっており、イヌビワとイヌビワコバチの巧妙な共生関係(パートナーシップ)を見て取れて、興味深い。ところで、日本のイチヂクにはコバチは入っていない。日本の寒い気候にあったイチヂクコバチはいないので、花粉がなくても実ができる(単為結果)イチヂクだからである。安心して食べることができる。



ヤブニッケイ（クスノキ科 花期/6～7月 結実期/11～12月）

クスノキ科だからでしょうか、この種子からは香油がとれます。ニッケイの樹皮や葉は、鎮痛薬や解熱薬としての薬用になります。葉の裏の白いシロダモに対してこちらをクロダモともいいます。別名をマツラニッケイといい、これは長崎県の松浦で樹皮を採ったことによります。クスノキ科クスノキ属の植物には、ヤブニッケイ、ニッケイ、クスノキがあります。ニッケイは「肉桂」で、その樹皮を「桂皮」といい、京都の八つ橋に使ったり、昔は細根の束を「ニッキ」といって、また抽出液を「ニッキ水」といって売っていました。



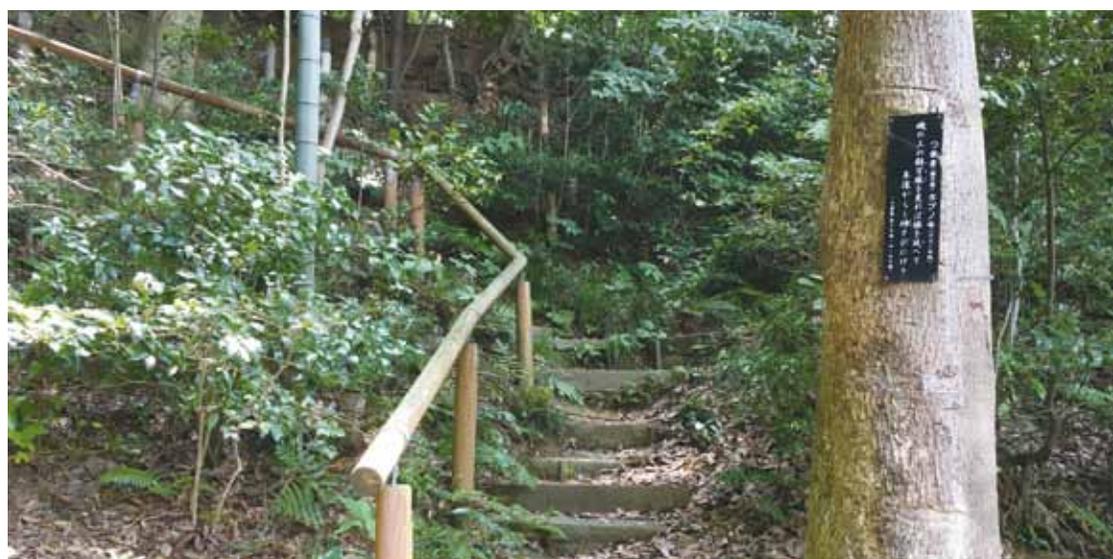
ヤブニッケイの蕾

ウラジロノキ（バラ科 花期/5～6月 結実期/10～11月）

葉の裏が白いので「裏白の木」といいます。山に生える落葉高木で、高さ10～15mにもなります。5～6月ころ、枝先に白い花が咲き、秋には1cmほどの丸く赤い実がなります。いずれも高いところにあるので容易に見ることができません。風のある日に、地面に落ちた花や実を見るしかありません。樹木は樹皮でも名前が分かりますが、落葉や落下した花や果実でもその名前を知ることができます。久徴園では、東屋から少し上がったところで見ることができます。



ウラジロノキ



久徴園内散策路

タブノキ (クスノキ科 花期/4～5月 結実期/7～8月)

タブノキは、暖地の海岸近くに自生し、シイやカシなどと共に照葉樹林を代表する樹木です。また、極相林^aを形成する樹木の一つと考えられています。葉を叩くと出る粘液を（恐らく昔は水車でついたのではないか）「ねり」と呼び、昔は和紙作りに利用しました。「ねり」は、和紙の原料のミツマタやコウゾの繊維を水中に分散させ、沈殿をふせぐことから、和紙を漉くのに必要な役割を担います。別名のイヌグスはクスに似ているが木質が劣っているということにより、久徴園にはたくさんのタブノキが生えています。



タブノキ

a 極相林/ 植物の群落が草原から森林へと移り変わり、最終的に行き着いた森林のこと。十分に長い年月(数百年)を経て成立し、安定した状態の森林を極相林と呼ぶ。

ノグルミ (クルミ科 花期/6月 結実期/9～10月)

歩道の下の方の中にノグルミという樹があります。日本のクルミの仲間はオニグルミ、ノグルミ、サワグルミの3種類ですが、これらはまったく異なる果実をつけます(下図)。だいたいイヌ、ヘビ、オニなどがつくと思われられないという意味ですが、クルミに関してはオニグルミは食べることができます。それに比べて、ノグルミは同じクルミ科ですが果実は似ても似つかない形をしていて食べられません。サワグルミは40～45cmにもなる果穂が垂れ下がり、それに翼果がつきますがこれも食べられません。生えているところもかなり違います。オニグルミは谷川や斐伊川などの川のほとりに、ノグルミは林の比較的乾燥したところ、サワグルミは奥山地の渓谷沿いなどに群落を作っています。サワグルミは久徴園にはありません。



ノグルミの実



オニグルミ



ノグルミ



サワグルミ



山頂広場までの散策路

コナラ (ブナ科 花期/4~5月 結実期/10~11月)

頂上近くの散策路から大きいコナラが見えます。縦に曲がった皮目^aが顕著です。

各地の山地にもっとも多くみられる落葉樹であり、炭の材料であり、シイタケの原木の代表でもあります。イヌシデと混じって生えています。コナラは万葉集でも「こなら(小櫛)」です。

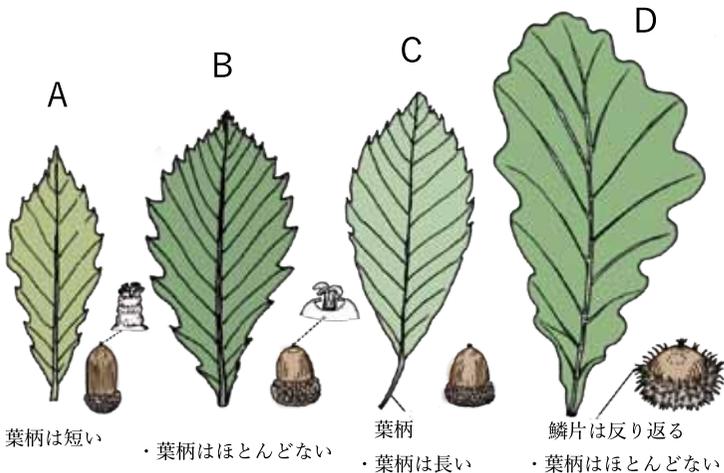
しもつけのみかもやま

下野国三叡山の小櫛のすま麗し児らは誰が笥か持たな (「万葉集」巻14-3242 東歌)



コナラ

a 皮目/樹の表面には、呼吸を目的にいろいろな形の裂け目ができる。これを皮目という。



・葉柄は短い

・葉柄はほとんどない

・葉柄は長い

・葉柄はほとんどない

◎ナラの類には、コナラ、ミズナラ、ナラガシワ、カシワなどがあります。ドングリのついているお皿(殻斗)には小さな丸いツブツブがあり、カシワは鱗片状になり、反り返っています。

葉の大きさだけでなく、葉柄の長さや鋸歯(葉の縁のギザギザ)の形で区別してみましょう。

図のA~Dはどれにあたるでしょうか？(答えはp.31)

イヌシデ (カバノキ科 花期/4~5月 結実期/9~10月)

幹は灰白色で縦に模様があり、老木になると浅くヒビも入ります。花が紐状の花穂になることをイヌの尾にでも例えたのでしょうか。シデとは玉串や注連縄などに下げる紙の「四手」「紙垂」のことで、垂れ下がった果穂に例えました。別名のシロシデは芽や新葉に毛があることによります。別の道から広場に出たところに大木があり標識がついています。シデの仲間には、イヌシデの他にアカシデ、クマシデ、サワシデなどがありますが、全て果穂が垂れ下がります。シイタケのほだ木として利用されます。



山頂広場にあるイヌシデ



昭和31年(1956年)頃の山頂広場



現在の山頂広場

山頂広場について

久徴園の山頂は広場になっています。平成17年(2005年)の久徴園整備により、展望台とベンチが設置され、令和2年には、老朽化した展望台の木柵が修繕されることとなりました。ここから北山、出雲市、斐川平野が一望できます。周囲にはソヨイヨシノやヤマザクラ、カエデ類が植えてあります。ここでは、勉強の合間に頭を休めたり、お弁当を食べたり、放課後ここから夕日を眺めて未来を語ったものです。応援歌の練習やフォークダンスの場所でもありました。かつてここに鷹の沢気象観測所があり、写真のように生徒による観測が続けられていました。



昭和33年(1958年)頃の山頂南側(グラウンド側)

この山頂広場や園路などは、久徴園整備と平田植物園再生のため、久徴会員をはじめとする多くの皆様からの「出雲高等学校校舎改築に伴う環境整備募金」によって整備されました。

平成18年6月設置

山頂広場には案内看板があります。平田植物園、特に久徴園は、平成17年～18年に久徴会の環境整備募金を基に、卒業生の多くの手によってこのように整備されたことが書かれています。卒業生の多くが、この久徴園での思い出を後生にも伝えたいとの想いがここに立派に結集されたのです。

山頂広場の平地には、ノアザミ、ウツボグサ、アキノキリンソウ、ドイツズラン、ガンピ、ヒヨドリバナなどがあります。山頂広場の奥には、ハンノキ、エゴノキ、サクラ類、トベラなどがあります。その右手には、肥後椿の椿園が見えます。

ノアザミ (キク科)



ウツボグサ (シソ科)



アキノキリンソウ (キク科)



ドイツズラン (キジカクシ科)



ガンピ (ジンチョウゲ科)



ヒヨドリバナ (キク科)



ハンノキ (カバノキ科 花期/2～3月 結実期/10～11月)

本来は、湿地などに生える5～15mの落葉高木で、島根県内では赤名湿原にあります。「榛の木」と書きます。ヤシャブシの実に似た1cmほどの松笠状の果穂をつけます。ハンノキは、色々な呼び名があり、キツネノカンザシ(岡山県)やオハグロボンボン(茨城県)、湿地に生えるので、バンノキ(島根県)、ミズキ、ヤチシバ、ヤチクワ、ヤチバなどがあります。石見地方には、サクラの葉のような鋸歯を持つサクラバハンノキという樹もあります。



ハンノキ林(赤名湿原)

エゴノキ (エゴノキ科 花期/5～6月 結実期/8～9月)

エゴノキ科の落葉小喬木で、山地や川畔でよく見られます。晩春に白い花を無数に下垂させ、雪が降ったようにも見えます。初秋に1cmほどの卵形の実をぶら下げます。その果皮や樹皮を噛むとえぐいのでそれが訛ってエゴイとなり、エゴノキとなったといわれます。昔は、若い実を磨りつぶすと泡状になるので洗濯に使用したり、大量に果実を磨りつぶして川に流すと下流で魚が浮いてきて捕獲したりしました。この果皮には、エゴサポニンを含んでおり有毒です。



エゴノキ

マサキ (ニシキギ科 花期/6～7月 結実期/12～2月)

海岸近くの林に自生しています。常緑で潮風や大気汚染に強く耐性があるので、よく生垣にされています。初夏に緑白色の花が咲き、秋にはオレンジ色の実ができます。鳥が実を食べにくるのは許せるものの、若芽を食べる毛虫には閉口します。海岸の葉の大きなものが原種です。「正木」とか「柁木」と書きますが、マサオキ(真青木)あるいはマセキ(籬木)が転じたという説もあります。斑入り葉のものをフィリマサキといいます。俗には斑の白いものを銀マサキ、黄色のものを金マサキともいいます。同じ仲間のツルマサキは、蔓に気根があって他物にからみついて登っていきます。若木の葉と花のつく枝の葉の形が違って別種のように見えます。マサキと同じような実になります。ニシキギ類の果実については p.101 を参照して下さい。



マサキの果実

柁木の実紅し入江に日を置きて (篠田麦子)

トベラ (トベラ科 花期/4～6月 結実期/11～12月)

暖地の海岸に多い雌雄異株の常緑低木です。日本海側の沿海部や庭、公園にも多く見られます。枝、葉、根に特有の臭気があります。木質の実が割れて、粘りのある赤い種子が顔を見せます。小鳥がその実を食べ、糞と共に広がりますから、いつの間にかあちらこちらに生えています。戸口にさして鬼を追い払う風習から、扉(トビラ)が転訛してトベラになったといわれます。香りのよい花を咲かせます。かつては、伊勢や出雲地方で、節分にトベラを扉に飾ったといわれます。



トベラの果実

答え A. コナラ B. ミズナラ C. ナラガシワ D. カシワ

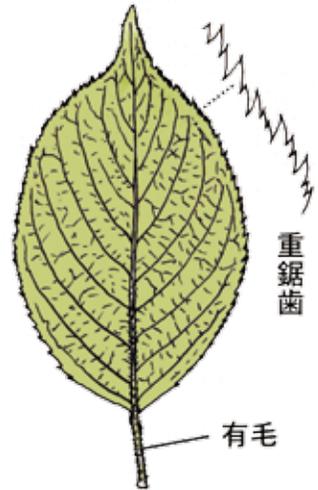


ソメイヨシノ (バラ科 花期/3~4月 結実期/5~6月)

「染井吉野」。江戸時代末期に、江戸の染井村の植木職人達によって育成され「吉野桜」として売り出したことによるといわれています。エドヒガンとオオシマザクラの交配雑種だといわれています。春、葉が出る前に桜色といわれる淡紅色の花が集めて咲きます。いわゆる「お花見の桜」で、気象庁サクラ前線の基準木です。ソメイヨシノは比較的短命だといわれていますが、全国に巨樹、巨木、老樹があります。日本のサクラの老樹としては、日本五大桜と称される「福島の三春滝桜」「埼玉の石戸蒲桜」「山梨の山高神代桜」「静岡の狩宿の下馬桜」「岐阜の淡墨桜」は国指定の天然記念物になっています。

ソメイヨシノの見分け方

- ① 葉の前半の鋸歯が重鋸歯である。(右図参照)
- ② 花柄や萼、葉柄にうっすらと毛がある。



ソメイヨシノの葉

ヤマザクラ (バラ科 花期/3~4月 結実期/5~6月)

「山桜」。山に生え、植栽もされている日本の野生のサクラ。属名にヤマザクラ *Jamasakura* がそのまま使われています。ソメイヨシノよりやや遅れて開花するようです。花色は淡紅色から白色まで微妙に異なります。ソメイヨシノが作出される以前は、ヤマザクラがお花見の桜でした。「一目千本」で有名な吉野山の桜は、ヤマザクラです。春、葉が展葉すると同時に開花し、葉桜となります。花の艶やかなソメイヨシノに比べ風雅のあるサクラであり、好む人も多くいます。若葉は赤味を帯び、樹皮も横に皮目が入り紫褐色で美しく細工物にも使われます。サクラの仲間では巨樹となり、長寿な種です。花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに (小野小町)

ヤマザクラの見分け方

- ① 葉の鋸歯が細かい単鋸歯である。
- ② 花柄や萼、葉柄に毛がない。
- ③ 花は葉を伴う。



ヤマザクラの葉

展望台から北側へ、一段下の台地に降ります。降りる途中に、ミツデカエデやマサキ、タブノキ、ヒサカキ、アカメガシワ、ネズミモチなどがあります。ここは少し急ですので足下には気をつけてください。

ハゼノキ (ウルシ科 花期/3~4月 結実期/5~6月)

雌雄異株であり、果皮からはロウを採ります。秋の真っ赤な紅葉は見事です。同じ仲間のヤマハゼは、茎葉に毛があり、ヤマウルシは果実に毛があるので区別できます。ウルシは栽培されていたものが逸出し、自生状態になっているものがあります。ハゼノキは「櫨」と書きます。

ハゼノキは、葉に触れたり、枝を折って樹液に触れるとかぶれることがあります。過敏な人はこの木の近くでは注意してください。

鳩鳥^aの息のながさよ櫨紅葉 (山口誓子)

a 鳩鳥 / におどり・カイツブリ



ハゼノキ

クロモジ (クスノキ科 花期/3~4月 結実期/9~10月)

三瓶山の8合目あたりを息切れしながら登る時、無意識に握っているほとんどがこのクロモジの枝でしょう。それくらいたくさん生えています。落葉樹林の林床を覆う低木です。樹皮にある黒い斑点が墨でしたためた文字に見えたのでしよう。「黒文字」の名前の由来になりました。早春、葉に先立って黄色の小花を枝先につけます

枝に傷をつけるといい香りがするので、茶道の爪楊枝の黒文字はこの木で作ったものです。



煎じて飲むと胃薬として、また胃潰瘍に効くといえます。

苦甘い香りがするお茶のような飲み物です。この木を切ってもらっては困りますが、持参のお菓子を楊子でさして食べながら、近くにあるベンチに座ってこの辺でお茶(たばこ)にしましょう。

くろもじの花球となる霧霽 (新井盛治)



クロモジ

ムクノキ (アサ科 花期/4~5月 結実期/7~10月)

牧野図鑑によれば多分、「^む剥く」の意味、あるいはザラザラした葉でものを「磨き^は剥がす」からでしょうかとしています。山地に生え、家の庭に植えているところも多くあります。先のとがった鋸歯(葉の周囲にあるギザギザの歯)の鋭い葉で表面はざらついています。核果は直径1cm少々で黒く熟すと食べられます。ケヤキと近縁のアサ科ムクノキ属の大木で幹直径1m以上にもなり、樹皮は老木になると縦に皮目が生じそれに沿って剥がれます。松江市の城山公園には大木があつて地際に板根(根が板状に地表に出たもの)が見られます。



ムクノキ



ムクノキの板根(城山公園)

ウラジロガシ (ブナ科 花期/5月 結実期/翌10月)

名前は「裏白櫨」です。文字どおり葉の裏が白い櫨という意味ですが、季節や樹の老若によって必ずしも白くない場合もあります。その場合は葉の縁の鋸歯が鋭く、先端から2/3位までであることを目安にすると良いでしょう。他のカシ類に比べて葉が小さいことも目安になるでしょうか。葉が波打つという傾向もあります(p.97参照)。果実=どんぐりは、翌年の10月頃に実り、落下します。殻斗(どんぐりを支えているお椀、お皿)には横輪があります。山地に比較的普通に生えています。ウラジロガシの純林は、谷沿いの傾斜地にできやすく、鰐淵寺や八重滝などに見られます。



ウラジロガシ

イヌザクラ (バラ科 花期/4月 結実期/6~7月)

サクラといってもソメイヨシノのような花ではありません。ここの樹は高いので、花は見づらいかもしれませんが、4月頃に長さ5~10cmの房状の花が咲きます。多数の雄しべは長く突き出ます。ウワミズザクラ(p.35)と似ていますが、花は小形で花穂の下に葉がない等の違いがあります。山地で希に見られます。



イヌザクラの花

オガタマノキ (モクレン科 花期/2~4月 結実期/11~12月)

「招霊の木」と書きます。元生徒昇降口にはもっと大きな樹がありました。暖地の山地に自生するものですが、霊を招く木ということで神社によく植えてあります。神社というとサカキですが、もともとはこちらを榊と称していたようです。サカキの方が玉串として形がよかったのか、あるいはサカキの方が寒さに強く、日本中の神社に広まったというような理由があったのではないのでしょうか。2~4月頃、径3cmばかりの白色で基部が紅紫色の花をつけます。秋から冬にできる果実は褐色で中に赤い種子を含みます。なお、中国原産のカラタネオガタマ(トウオガタマ)は、4~5月頃、黄白色で縁が紅色のバナナ臭のある花をつけます。出雲大社の結婚式場の東、谷川との間に植えられています。



オガタマノキ

ウワミズザクラ (バラ科 花期/4~5月 結実期/6~7月)

サクラの仲間ですが、イメージが随分違います。5月頃、葉が出てから枝先の総状花序に白い花が咲き、長い雄しべがたくさんあります。樹皮が黒っぽいこと、皮目が横に長いことから樹皮の細工物に使い、蕾や若い葉を食用にするといいです。万葉集ではウワミズザクラは「櫻皮(かには)」と考えられています。よく似たイヌザクラ(前頁)と比較してみてください。

あじさはふ妹が目^か離れてしきたへの枕もまかず
櫻皮巻き作れる舟に

(「万葉集」巻6-0942 山部赤人)



ウワミズザクラ

ズミ (バラ科 花期/4~6月 結実期/9~11月)

山地に多い落葉樹で、晩春から初夏に掛けて山地にポツンと白い霞を落としたように見ることがあります。リンゴに近縁な野生種で、地方によってヒメカイドウ、コリンゴ、コナシ、ミツバカイドウなどと呼ばれることがあります。紅色の蕾が開くと白い花になります。果実の頭には萼の落ちた跡が残ります。ズミという名前は、皮を染料にすることから「染み」という言葉が訛ったもの、実が酸っぱいので「酢実」が訛ったものという説があります。



ズミの花

ガマズミ（レンプクソウ科 花期/5～6月 結実期/9～11月）

山野の日当たりのよい所に普通に生える2～4mの低木です。対生する葉は丸く大きく、葉脈は裏面に凸出し目立ちます。葉の両面に硬い毛が密生するのでコバノガマズミやミヤマガマズミ(p.138)と異なり区別できます。枝の先に散房花序に白色小花が咲き、秋には光沢のある赤い実が美しく、霜が降りる頃には甘くなり食べられます。葉が落ちる冬でも実が残り、雪をかぶった実は誠に綺麗です。弾力に富む幹は鎌の柄、杖、かんじきの材料にされます。実の黄色くなるキノガマズミもあります。



ガマズミの果実

がまズミの透き通るほど熟れにけり（多田雄石）

センダン（センダン科 花期/5～6月 結実期/10～12月）

「梅檀」と書きます。「梅檀は双葉より芳し」のセンダンだと思われていますが、この梅檀はインド原産の白檀のことで、日本のセンダンとは異なります。でも、この言葉にあやかって学校などによく植えられています。公園や街路樹としてもよく見かけます。5～6月、紫色の小さな花を沢山つけ、秋に黄色で楕円形の実がなりますが、葉が落ちてからも残り、冬、雪を頂いた果実を見ることもあります。ヒヨドリなどの餌となります。果実に有毒のサポニンを含みますが、なぜか鳥には害にならないようです。



センダン

クロキ（ハイノキ科 花期/3～4月 結実期/10～11月）

クロキは、樹皮が黒っぽいので「黒木」と書きます。海岸部で10mほどの樹になる常緑樹です。春、葉の付け根に多数の雄しべが取り巻く白い花序を咲かせ、秋には1cmほどの紫黒色の果実がなります。材は薪にして灰を取り、染色用の媒染剤としました。黒木といっても樹皮が黒いだけでは、クロキと決めかねます。樹皮の黒い樹木は他にもあるからです。大木が多く手が届きにくいかも知れませんが、上記の花や果実を確かめてから決定します。

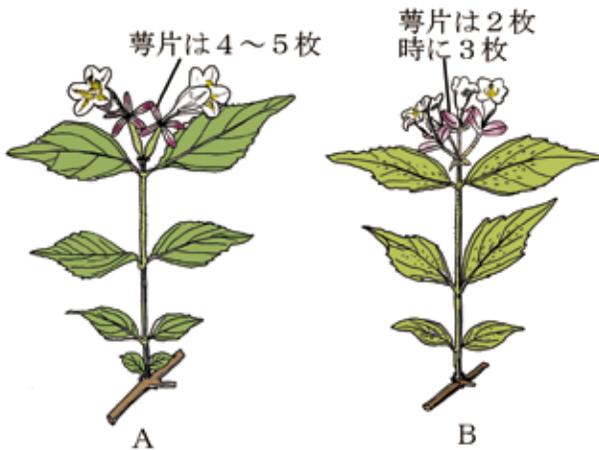


クロキの樹皮

コックバネウツギ (スイカズラ科 花期/5～6月 結実期9～10月)

ツクバネウツギは、正月の羽根突きの羽根に似た果実ができます。ビャクダン科のツクバネよりは羽根の球の部分がはるかに長くなっているのが特徴です。また、ウツギに似ているという意味ですが、スイカズラ科ですからニワトコ、ガマズミ、ゴマギ、ヤブデマリなどの仲間です。枝や葉がよく茂ってウサギが隠れても分からないということから別名をウサギカクシともいいます。

山地にあるコックバネウツギは、花は淡黄色で、花の下に萼片が2～3枚あります。ツクバネウツギの萼片は4～5枚なので、見比べてみて下さい。図のA、Bはどちらでしょうか。(答え p.39) また、生垣や庭木として植えられているハナツクバネウツギ(アベリア/花期5～9月)は同じ仲間ですが、よく分枝し花期が長いのが特徴です。



コックバネウツギ

イヌザクラから右下へ降りていくと、セメントの大水槽があり、このあたりは、タブノキやクロマツ、スダジイの大木が森林をつくっています。これらの高木層に、カクレミノ、ネズミモチ、イヌビワ、ヤブニッケイ、サカキ、ヒサカキ、ヤツデなどといった亜高木層、低木層、シダやササなどの草本層が階層構造をつくっています。この辺りの坂道は急で滑りやすいので足下には十分注意しましょう。やがて校舎が見えるベンチに出できます。このあたりのクロマツには、ツタが登っています。



久徴園内の散策路

キヅタ (フユヅタ) (ウコギ科 花期/10~11月 結実期/翌4~5月)

クロマツの樹によじ登っている蔓植物をキヅタといいます。葉は薬用になるといいますがどうでしょうか。キヅタ(フユヅタ、冬蔦)は気根があって木や岩にからみつき、常緑で冬でも青々としています。若葉や下部の葉は小形で3~5中裂しますが、花のつく枝や老木になると全縁になり別種のように見えます。久徴園には、あちらこちらに大木があり、キヅタがはい登っています。また、次に紹介するツタ(ナツヅタ、夏蔦)は、ブドウの仲間で吸盤があり、紅葉してから落葉します。甲子園球場の壁は、このツタ(ナツヅタ)です。観葉植物のアイビーはセイヨウキヅタともいって、キヅタの仲間です。

付着根をもつツル植物の検索表(Yes、No形式で進み、種類を特定する表)を示します。(矢野亮著「街の自然観察」より)では、A、B、Cと順に進んでみて下さい。

- A1 気根(付着根)に吸盤がある.....ツタ(ナツヅタ)(ブドウ科)
- A2 気根(付着根)に吸盤がない
 - B1 葉は互生である.....キヅタ(フユヅタ)(ウコギ科)
 - B2 葉は3枚の複葉である.....ツタウルシ(ウルシ科)
 - B3 葉は対生である
 - C1 葉に鋸歯がある.....ツルマサキ(ニシキギ科)
 - C2 葉に鋸歯がなく、全縁である.....テイカカズラ(キョウチクトウ科)

ツタ (ブドウ科 花期/10~11月 結実期/翌4~5月)

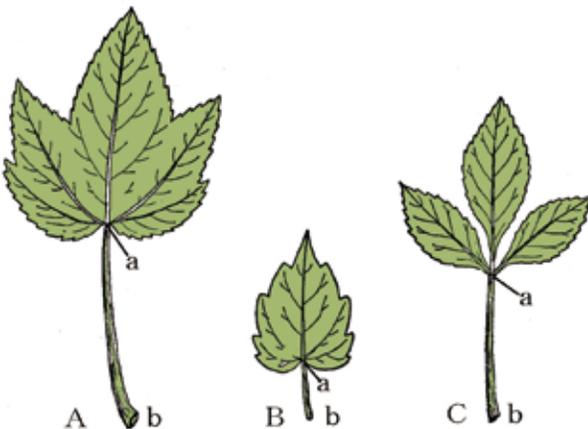
落葉することからナツヅタ(夏蔦)といい、平安時代にこれの茎から出てくる液を煮詰めて甘味料を採ったことからアマヅルとかアマズラともいいます。蔦という字を当てるのは間違いであり、他物に「伝う」が転訛して、ツタになったとされます。いわゆるツタモミジと称される紅葉はみごとです。

まひら戸に蔦這ひかかる宵の月 (芭蕉)

ここで問題です。ツタの葉はA~Cのどれでしょうか。

また、ツタは紅葉後に落葉しますが、下記の①~③のいずれにあたるでしょうか。答えはp.41。

- ① a から先が落ちる
- ② b から先が落ちる
- ③ a、b 同時に別々に落ちる



ハマビワ（クスノキ科 花期/10～11月 結実期/翌6月頃）

ハマビワは、「浜枇杷」と書き、葉がビワに似ていて海岸部に生えるからです。葉裏に微毛が密生します。海岸に群落をつくる7m以下の常緑樹です。南方から山口県の沿岸部を北上してきて島根半島や隠岐が北限とされる植物です。花は秋に咲き、果実は冬を越して翌年の6月ころに熟します。葉が厚く混んでいて、林立する茂みをつくる性質があるので、海浜部の砂防、防火、防風樹として庭木にも利用されます。



ハマビワ

クリ（ブナ科 花期/6月 結実期/9～10月）

「栗」です。栗の語源は、落ちた実が石のように堅く見えることから石の古語「クル」から来たとか、朝鮮語の「Kul」から来たとかの説があります。クリは昔から重要な山の幸であり、材は建築材、薪炭材、シイタケ栽培の原木など用途は広く、秋に稔る栗の実には食材として焼き栗、栗あん、栗きんとん、お菓子の材料等に利用され、葉もタンニンを含み薬用になります。専門的には、クリはブナ科に属しシイ類、カシ類、ナラ類と同じくドングリの仲間です。クヌギやカシワの殻斗^aに当たる部分がいが状になっています。実も1殻斗中に1～3個入っています。



クリの花

^a 殻斗/ブナ科植物の子房を包む袋状や椀状の部分で、堅果の基部または全体を覆う。俗にいうドングリのお椀・はかまのこと。

スダジイ（ブナ科 花期/5～6月 結実期/9～10月）

この樹もかなり大きいですが、大きくなると高さ20～25m、幹の直径1.5mにもなります。自然林では純林となってこんもりと茂り鬱蒼としたスダジイ林をつくります。暖温帯の極相林の一形態となります。純林が少なくなった今日では、スダジイ林は神社、仏閣の社寺林として見られます。サブコース後半にもある大きなスダジイは、下から見ると樹形がよく分かります。単にシイというと、このスダジイを指すことが多いようです。秋に熟す果実は、殻斗で完全に被われていて、はじけると黒色のシイの実がこぼれ落ち、食べられます



スダジイ

マテバシイ (ブナ科 花期/6月 結実期/翌10月)

常緑の10～15mにもなる高木で葉も大きいです。潮風や強風に強く、防風林にもなるので、松と共に出雲地方の築地の代表的な樹種です。この樹もかなり大きく成長しています。ドングリは翌年秋に実り、落下します。長さ22～27mmと大きく、底が凹んでいます。中にデンプンが充満していて、煎ったり、ゆでたりして食べることができます。古代から主要な食料でした。また、コマや野次郎兵衛などにして遊んだりもします。



マテバシイ

アベマキ (ブナ科 花期/4～5月 結実期/翌年秋)

この樹の樹皮はコルク層^aが発達して深い”あばた状”になります。アベマキとは変わった名前ですが、岡山県であばたの事を「アベ」といい、薪の「マキ」が合体して「アベマキ」になったといわれています。葉はクリに似ていますが、殻斗はいが状にはならず、柔らかく中に大きな実(ドングリ)が1個入っています。



アベマキ

.....
a コルク層/ 樹皮の細胞にリグニン等が沈着し、水や空気、病原菌などを通さないようになった組織。コルクガシのコルク層は弾力性があり、コルクを作る。

ベニワビスケ (ツバキ科 花期/12～4月)

ツバキとチャノキの合いの子といわれています。ここにあるのは赤いベニワビスケです。何となく茶道の「侘び」から出たという説や、侘びとは何の関係もなく、豊臣秀吉の朝鮮出兵の時に1人の兵士が日本に持ち帰ったもので、その兵士の名前が侘助であったという説などいろいろな俗説があります。p.24の図を参照。



ベニワビスケ

侘助の落つる音こそ幽かなれ(相生垣瓜人)

答え A.B.Cは全てツタの葉。

①3葉ともa点から落葉。(紅葉したツタを見ると、葉身だけ落葉して、葉柄が残る様子が分かるでしょう。)

ブナ（ブナ科 花期/5月 結実期/9～10月）

ブナは、中国山地の標高800mから1000mあたりに大きなブナがブナ林をつくっています。灰色っぽい幹が特徴です。ただのブナは幹が白っぽいのでシロブナといいます。別種のイヌブナは黒っぽいのでクロブナともいわれます。落葉の頃、実も熟し、小さくて食べにくいですがクリよりもクルミよりもはるかに美味しく感じました。山の動物はこんなにも美味しいものを食べていたのかとびっくりする程の味です。一度ブナの自然林を訪ねて実を拾って食べてみて下さい。



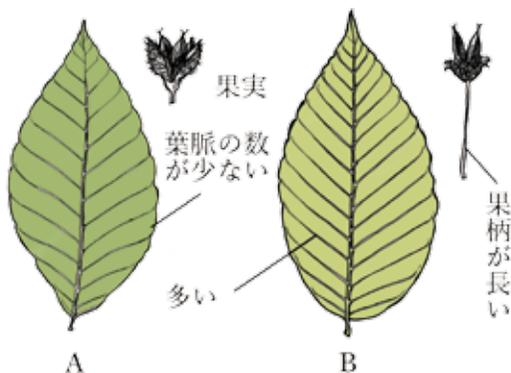
ブナ

イヌブナ（ブナ科 花期/4～5月 結実期/10月）

ブナ科の落葉大木です。ブナより標高の低いところに生え、太平洋側の山地に多いといえます。島根県の山地でも見られます。ブナによく似ていますが、イヌブナは①葉の側脈が10～14本とやや多い。②果柄がブナより長い等の点で区別します。では、葉を見て下さい。イヌブナは、図のA、Bどちらでしょうか。答えは次ページにあります。



イヌブナ



アオハダ（モチノキ科 花期/5～6月 結実期/9～10月）

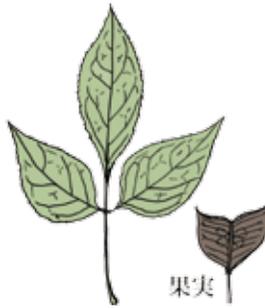
山地に生える高さ10mほどの落葉する高木です。アオハダは「青膚」と書き、表面が灰色の樹皮を剥くと緑色の内皮という部分が現れるので青い肌の木という意味で「青膚」と名前がつけられました。晩春に緑白色の小さな花をつけ、秋になると雌株には直径約7mmの赤い果実がなり、冬に葉が落ちても枝先に残って綺麗です。この木も高木になり、花や果実は高い所につくので容易に見ることができません。



アオハダ

ミツバウツギ (ミツバウツギ科 花期/5～6月 結実期/9～10月)

ミツバウツギは「三葉空木」ですが、ウツギの仲間ではなくミツバウツギ科という独立した科の一種です。山地にあり、葉は3出複葉、6月頃枝先に円錐花序^aを出し、白色花弁は白色萼片よりわずかに長く、半開して完全には開きません。9月頃できる果実は平たく先が2～3裂して尖り、横に脈が目立つ独特の形をしています。枝がまっすぐに伸びる性質があるので箸に使われ「箸木」の方言もあります。



ミツバウツギ

a 円錐花序/円錐形の輪郭をなす花の房のこと。ナンテン、ネズミモチ、イネ科など

カラスザンショウ (ミカン科 花期/7～8月 結実期/9～10月)

名前の由来は、①サンショウに比べて樹が大きく、利用価値が低い。②カラスがこの実を食べることからとされています。小葉が13～23枚もある大形の葉(奇数羽状複葉)です。高さが7m程度にまで伸び、幹に棘があります。この棘も樹が小さい時は鋭く、大きな樹になると丸くなり、歳をとると丸くなる人生に例えて“カラスザンショウ人生”といえます。枝の葉が落ちた跡(落葉痕)を見ると、写真のように何かの動物の顔を想像させます。いろいろと面白い樹です。



カラスザンショウ

エンレイソウ (ユリ科 花期/4～6月)

土地の少し湿った林床に生え、10cm前後の3枚の葉をつけます。茎の先、葉の中央に褐紫色の花をつけます。3枚の花びらに見える部分は萼に当たります。「延齡草」と書きます。アイヌ語では、「エマウリ」と呼んで、それがエムリ、エムレ、エンレイと変化したとの説があります。もう一つは、漢名で「延齡草根」という胃腸薬であったという説。中国では、民間薬として知られ、高血圧、神経衰弱、胃腸薬に使われていました。薬の用途が多く、いくつかの古文書にも登場することから、薬草効果がある「延齡草」になったとする説が有力です。



エンレイソウ

ここで、久微園メインコースは終点です。ご苦労様でした。

答え A. ブナ B. イヌブナ

私は昭和37年、13期卒業ですから、学舎を後にしてもう60年足らずが経過したことになります。入学した当時は、まだ木造の建物で、その周りの敷地には様々な植物が植わっており、敷地の奥には久徴園の森も広がり、建物と木々の緑とが空間的なゆとりがあって、全体に手入れが行き届いていましたから、植物に馴染んでいた私には魅力的な環境での学生生活だったと回想しています。

また、この頃は、日本が高度経済成長に向かい始めた頃でしたから、今日のような情報を追い求め、ことあるごとに競争を意識しなければならないストレス社会とは異なり、まだどことなくのんびりした、ゆとりが感じられる頃でしたから、生来、自然を友として自然の中で遊ぶのが大好きな私としては、入学とともに生物部への入部を希望しました。以来、久徴園や平田植物園の植物たちとの付き合いが始まりました。

折しも、その当時は、園丁として、柳楽茂先生。シダ植物を研究されていた中井春治先生（のちに日御碕経島のウミネコの研究で多大な貢献をされた）、隠岐サンショウオの研究に没頭された佐々木茂先生の薫陶を受け、学業はそっちのけで野外での楽しみ方をたっぷり教えていただきました。

これらの経験が、実は、その後の趣味にも結びつき、後期高齢者となった今でも、自然に遊び、自然とともに生きたいという私の信条を支えています。また、こうした想いが暮らしの中でのおおきな癒しにもなっております。

そのような経緯から、今でも久徴園整備には、生物部のOBの一人として、学校主催の久徴園の整備事業には出来る限り参加して、伝統ある緑の環境維持に協力をしてまいりました。ただ、こうした作業を通して感じることは、つつい当時の柳楽茂先生の口癖であった「植物は私の子供たちだ」という言葉を思い出さずにはいられません。園内の植物を本当にかわいがって入念な手入れをされておられましたし、とにかく、植物に対する想いが尋常ではなかったので、入念に整備が行き届いていたという印象がありました。

そのような見方からすると、正直、今は、先ず、建物の整備が進められた反面、植物群と建物とのバランスが崩れ、特に、久徴園の顔とも言えるメタセコイアが象徴的な正面の空間的なゆとりが何となく窮屈になってきているのが残念で、また寂しさを感じております。先ずは学業第一ですから施設整備を優先させることはやむを得ないと思いますが……。

ところで、今日のハイテク化・情報化が著しく進展する世相の中で、私たちは、今、ものすごくストレスを抱えながら生きていることを想うとき、出雲高校のこの「翠色濃き鷹の沢」の素晴らしい翠多き環境が若い世代にとっても、また、教師にとっても何かしらの癒しになっているに違いありません。春の新緑や春咲く花々に何となく憩い、夏には木陰を提供し、秋には紅葉に心惹かれる、そんな場面が数値では測りえない癒しの環境を醸していると思っています。そう考える時、何となくバロック音楽の通奏低音の響きに例えることが出来るかな……とったりしています。

そもそも、人間の進化の過程を考えたとき、脳がリラックスできるのは自然に触れているときだと言われております。そうであれば、翠（緑）を提供する植物や、松吹く風や鳴く鳥の声は1/fの響き、そんな環境は、先人が守り・育ててきた大きな財産とも言えますので、これからも久徴園を始めとした学舎内の翠の環境を継続して守っていかねばなりません。

折しも、今、地球温暖化がグローバルな課題となっており、グレタ・トゥーンベリーの悲痛な訴えが世界的に反響を呼んでいる昨今、これからは地球環境を保全する経済的・科学的・人材的取り組みを加速していかねばならない時代に入りつつあります。そんな意識を育てる環境が出雲高校にはあるのではないのでしょうか。

100周年の記念すべき時だからこそ、レガシーの一つとも言える平田植物園・久徴園を管理していくシステムを構築して、未来につなげていく必要性を大いに感じております。

私も微力ながらではありますが、今後も協力をしてまいりたいと思っております。



昭和41年(1966年)頃の久徴園入口付近



正門前の坂道/昭和37年(1962年)頃



昭和20年代の図書館の様子



温室/昭和29年(1954年)頃